

楓橋夜泊（張継）

月落烏啼霜滿天

江楓漁火封愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

解説 楓橋のあたりで、夜、船中に泊ったときの旅愁をよんだ詩。

月落^{つきお}ち 烏^{からす} 啼^ないて 霜^{しもてん}天^{てん}に 滿^みつ

江楓^{こうふう} 漁火^{ぎよか} 秋眠^{しゅうみん}に 對^{たい}す

姑蘇^{こそ} 城外^{じょうがい}の 寒山寺^{かんざんじ}

夜半^{やはん}の 鐘聲^{しょうせい} 客船^{かくせん}に 到^{いた}る

語釈 ※楓橋 江蘇省蘇州にある橋の名。 ※夜泊 夜、船の中で泊ること。 ※月落 月が西山に落ちること。 ※烏啼 烏が鳴くこと。

※霜滿天 霜のおりる気配が上空に満ちていること。 ※江楓 川岸にはえている楓。 ※漁火 いさり火。魚を捕るためにもやす火。

※愁眠 旅愁のため熟睡できず、うつらうつらとしていること。

※姑蘇城 春秋時代の呉の都。今の蘇州。 ※寒山寺 楓橋に近いので楓橋寺ともいう。

通釈 月は西山に没し、烏は鳴き、霜の気配は空一面に満ちている。岸の楓や点々としたいさり火が、旅の憂いのために熟睡できず、うつらうつらとしている。もう夜が明けかと思っていると、姑蘇城外の寒山寺から夜半を知らせる鐘の音が、私の乗っている船まで聞こえてくるのであった。